
仲間 (グレイ夢?)

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仲間（グレイ夢？

【Nコード】

N5712M

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

師匠に行かされてしまった理由。

《仲間》とは？

（前書き）

グレイはかっこいいと思うな

出会は突然にやってきた。

僕の師匠が死んでいく当てのなかった僕を拾ってくれたのがフェアリーテイルのマスターだった。

マスターは死んだ師匠の最大の親友だったらしく喜んで受け入れてくれた。

でも、人付き合いが苦手な僕は毎日のようにギルドで問題を起こしてはマスターに怒られていた。
そんなある日のことだった。

「おい。レノ。」

「・・・マスター。ごめんなさい。」

「なーに気にすることない。」

「話があるんですよね？」

「おお。そうじゃった。お前に友達を紹介しよう。」

「へ？」

思わぬマスターの言葉に首をかしげた。

マスターの視線の先には四つの影があった。

「うわーこの子が新人の？」

「ほー。可愛い奴だな。」

「強いのか？」

「いきなりかよ。」

四人の影はそれぞれ僕を見て意見を言ったが僕が彼らに対する最初の意見は・・・。

「怖い。」
「へ？」

四人の声が被ってついでに視線も被る。
僕はマスターの背へと逃げて彼らから隠れた。

「こらこら。逃げるんじゃない。」

まあ、結局マスターにまたもとの位置に戻されたけど。

もう一度四人を見るとほかの奴らと特に変わったところは見られなかった。

一人は噂には聞いていた人で^{サラマンダー}火竜のナツ。

同じく噂に聞いていた妖精の女王のエルザ。^{ティターニア}

そしてもう一人はルーシイっていう女のひと。
最後にこの人は師匠の話によく出てきた人だ。

「グレイ・フルバスター……。」

「ん？なんだお前グレイのことを知っていたのか？」

「え？俺かよ。」

本人グレイは首をかしげて思い出を書きあさっているのだろう。
だが、僕とグレイは一度も会ったことがない。

「師匠が……話してた。あんたのこと。」

チロリとグレイに視線を移すとまだ何か考えてる様子だった。

「リックマン・ボトム。」

「リックさんの弟子！？」

「おお！リックさんの弟子か。」

「大きくなつたな！」

心底驚いたようにグレイは僕を見つめていた。
ほかの二人も師匠を知っていたようだ。

僕だってあの師匠を《リック》と呼べるほどグレイが浸しかったとは思ってもなかった。

「そうじゃ。」

「おい！坊主。リックさんは？元気なのか？」

「・・・。」

「どうした？」

押し黙る僕の気持なんて知らずにグレイはどんどん深く傷をえぐって行った。

（浸しいのにどうして・・・師匠の死を知らないのさ！）

僕はそう思っただけグレイたちの前から立ち去った。

泣きたくてもだれも胸なんて貸してくれない。貸してくれるわけがない。

《この世は厳しくてそう簡単に前に進めるものじゃない。》

師匠は言っていた。

だから僕は泣かない。頼れる人がいないのは普通のこと。

人間。死ぬ時、生まれるときもずっと一人なんだから。

「俺なんか言っただか？」

自分が何を言ったのか、どれが彼を傷つけたのかグレイには理解できなかった。

その答えはマスターの口から紡がれた。

「死んだ。」

「え？」

「リックさんが？」

「嘘だろ？じつちゃん。」

「・・・ほんとじゃ。」

どれほどリックマンという男が強かったか少なくともその四人は知っていた。

だから、そのリックマンが死んだという知らせはあまりにも信じられなかった。

「まだお若かったのに・・・。」

「なんでだよ！」

「じつちゃん。」

「・・・弟子を守ったのじゃ。」

「あいつを？」

静まるギルドの中でマスターの声だけが響く。
みんなはその声に耳を傾けて話の続きを聞く。

「ある任務でリックマンは弟子の危機に対面した。見殺しにだってできた。が、リックマンは自分のことを信頼していた弟子を裏切ることはできなかった。最後まで信じ続けてくれた弟子にリックマンは心を打たれて自分の命を犠牲にして弟子を守ったんじゃ。」

「リックさんがそこまでして守った弟子・・・。」

「きつと心の強い奴なんじゃろうな。だが・・・リックマン以外の人間はすべて敵と思っておるのじゃ。あれでは到底力を発揮させるのは無理じゃろう。」

マスターはそういういつものカウンターへと戻って行った。

お酒を口に運びながら何かを考えた。

ギルド内はいまだに静かでちょこちよこ人がしゃべり始めた。みんなリックマンの死をいまだに受け止めきれていないのだろう。ルーシィを置いて三人もまだ一言もしゃべっていない。

「ちょ・・・なんか暗いね。」

「はい。リックマンはマスターの大親友だったしここの第二のマスターでもあったんです。」

ハッピーがルーシィに説明する。

どんな人が知らないルーシィには自分がどうすればいいのかわからない。

「まあ、リックさんもそんな悲しむと喜ばんぞ！」

いきなりエルザがそう叫んだ。
すると口ぐちにみんなが言葉を発し始めた。

「だよな。」

「リックマンさんがこんなシケたのは好きじゃねえーよね。」

「よし盛り上がるぞ！」

「リックマンさんのためにも！」

そういつていつものフェアリーテイルが復活する。

みんなが楽しく笑って談笑する。

エルザもルーシィもナツも笑っていた。

けど、そこにグレイの姿はなかった。

「どうして・・・いないんですか？ 師匠。あのとき僕を見殺しにし

ていればあなたは生きれたはずでしょ？なのに・・・どうしてですか？僕はあなたがいなければ生きて行くことができない。」

川べりで胸に下げられていたロケットを見つめながらレノは言った。ロケットには亡きリックマンがいた。強くロケットを握りしめてレノは涙をこらえた。

「なんで・・・泣かないんだよ。」

いきなりの問いかけ。

レノは慌てて後ろを向きながら立ち上がった。

そこに立つのはさっきで会ったばかりのグレイだった。

「グレイ・フルバスター。」

「フルネームで言われると調子狂うな。」

頭の後ろをかきむしりながらグレイはレノに近づいた。けど、レノは後ずさるばかり。

「近づくな・・・。」

「警戒心が強いんだな。」

「師匠以外の人間など信用できない。」

「どうして？」

「・・・お前に話す義理はない。」

そついうとレノは川を横断して向かい岸へと逃げて行った。

「ちょ！待てよ！」

グレイは慌ててレノの背中を追った。

レノは恐れた。

自分の心の中にツカヅカと踏み込んでくるこの得体のしれない男に。

（僕は・・・師匠しか信じない。）

かたい胸の決意は崩れることはない。

師匠が死んでもこれだけは砕けない。絶対に。

「おい。待てって！」

しばらく走ったところで 그레이 が先回りしたのレノは捕まった。
がっちりと腕を掴まれてしまってもう逃げることはできない。

「信じられないって・・・どうしてだよ！」

「・・・。」

「・・・言わなきゃわからないだろ？」

「わかってもらわなくてもいい。」

「俺は知りたい。お前のこと。」

「・・・なぜ。」

「リックさんが自分の命を犠牲にしてまで守ったんだ。興味があるに-。」

「それだけか？」

「え？」

さつきとは雰囲気が違うレノの言葉に 그레이 は言葉を止める。

強く手を握りしめて歯を食いしばって何かをこらえるレノ。

「あんたもほかの奴と変わりはない。僕が師匠の弟子だから・・・
リックマン・ボトムって男の弟子だからそれだから僕に近づいて仲
良くして・・・でも僕が弟子じゃなくなったら興味なんかなくなっ
ておさらばだろ？ふざけるな！僕の何を見ているんだ！僕は僕だ！
レノ・ビースと言う名のただの少年を誰も見てくれない！みんなリ

ツクマンの弟子としてしか僕を見てください！なんで？僕はここに
いるのにどうしてなのさ！！！」

レノが語るにつれてその語尾は激しくなっつてついには訳もわからず
レノは叫んでいた。

グレイはそれをただ聞いていた。

「・・・僕はボクだ。」

最後にレノはそれだけつぶやく。

それは自分への確かめのように聞こえた。

グレイはレノに静かに歩みよって頭にゆっくりと手を置いてやる。

何もしゃべらなかつた。

言葉なんていらすとも手から伝わる気がした。

レノは涙を流した。

大声で泣いて泣いてでも、グレイの胸に飛びついたりはしなかつた。
ひたすら泣いて泣いて大声で泣いて。

グレイはレノの頭をなでるだけ。そして、その泣き声を聞いて天を
仰ぐ。

夕日が水平線のかなたへと落ちて行く。

それでもレノは泣き続けていた。

次の日。

レノはフェアリーテイルに姿を現さなかつた。

グレイはいつものようにいつの間にか服を脱いでいていつの間にか
服を着ていた。

けど、いつもとは違う。何かが心に引っかかっている・・・その理
由に予想くらいいついていた。

(レノ・・・。)

会おうとは思わない。ただ、待っていた。レノが来たときに備えてずっとずっと――。

「マスター。」

「ん？」

「レノくん。きっと心を開けますよね？」

ミラジエーンがマスターに笑顔で尋ねる。

マスターも笑顔で

「おお。大丈夫じゃ。」

と返事を返す。

一週間後。

グレイは珍しくカウンターの席で酒を口にしていた。誰かを待つてる様子で誰も近寄ろうとはしなかった。

「ミラ。もう一杯。」

そういつて二杯目の酒を口にしようとした時だった。

「おい。あれ・・・レノか？」

「そうだろ？」

「やっと帰ってきたのかよ。」

そんな声がグレイの耳に入った。でも、後ろを向くことなくただ二杯目の酒を口へと流した。

足音は徐々にグレイへと近づいてきてしまいにはグレイの隣の席を開けて隣に座った。

「……………」

無言なままのレノ。そこに笑顔のミラジエーンが駆け寄る。

「久しぶり。レノくん。」

「……………」

「何か飲む？」

「…………水。」

相変わらず無愛想なレノ。

それでもミラジエーンは笑顔で対応をこなす。

水を取りに行く時間その数分だけ二人の空間が生まれる。

グレイの酒を飲む音がひたすらレノの耳に入る。

沈黙の続く空間。

そこに言葉を導入させたのは――。

「なあ、レノ。」

やはりグレイだった。

「……………」

「返事をしたくないなら別にかまわねえー。だから聞いてくれ。」

「……………」

「お前は俺に本当の自分を見てほしいか？」

「……………」

「リックさんの弟子じゃなくて、レノって言う一人の少年としてみてほしいか？」

「・・・。」

「俺はよー初めて会ったときからリックさんの弟子としてなんか見てないぜ。」

「！」

初めてレノが 그레이 のほうに視線を向けた。

でも、그레이 はレノに視線を向けることなくただ淡々と話を話し始めた。

「最初に会った時にお前のことをリックさんの弟子じゃなくて《新しい仲間》として興味がわいたんだ。で、そのあとリックさんの弟子って聞いて興味が膨れ上がった。ただそれだけの話だ。お前の思っているほどみんなはお前を見ていないさ。こいつらはいつも馬鹿騒ぎして怒られてそれでも笑って仲間と居れることの大好きな馬鹿な俺の《仲間》さ。」

につこりと笑う 그레이 はすごく楽しそうそうまるで・・・。

「・・・師匠。」

「リックさんはお前の信じる心に惚れたから命を賭けて守った。だから、今度は俺らフェアリーテイルの仲間がお前の信じる心に惚れさせてくれないか？」

「・・・ 그레이 ・フルバスター。」

「もしお前が俺を仲間と思うなら名前で呼べよ。いいか？レノ。」
「・・・。。。」

レノが下をうつむいて無言になる。

그레이 は目をそらすことなくレノを見つめる。

けど、レノは席を立ちあがってS級ランクのクエストが貼られてる二階へと逃げてしまう。

ミラジエーンが追いかけようとするがマスターがそれを止めた。
グレイは一瞬だけ悲しそうな目をして残った酒を口の中へと流し込んだ。

「ダン！」

何かに飛び乗った大きな音とともにみんなの視線が上の階へと集まった。

グレイも不思議がってカウンターから少し離れてみんなのところに言ってみた。

すると、そこには――。

「僕の名前はレノ・ブース！ただの・・・少年だ！」

レノがそれだけを叫んだ。

けど、歓声上がるわけでも拍手があるわけではなかった。

それは・・・まだレノが喋ろうとしてるのがわかったからだった。

「僕を・・・この・・・フェアリーテイルの・・・。」

口ごもるレノの声は聞きとりにくかった。

それでもみんなは消して聞き逃しはしなかった。

そして、レノが大きく息を吸い込んで叫んだ。

これから彼が冒険して仲間を持つための最初の一步。

「《仲間》として迎えてくれますか！」

みんなの表情が一気に温かくなって笑顔がほころんだ。
グレイが近くにあったジョッキを持ってレノへと掲げた。

「新しい俺らの《仲間》に乾杯！」

そういうとほかのみんなも近くのコップや酒瓶を持ってレノへと掲げる。

そして、精一杯の声で答えてやる。

「乾杯！」

その言葉を聞いた瞬間レノは涙がこぼれそうになった。けど、ぐっとこらえて満面の笑顔で笑って見せる。

その手にはいつ手に入れたのか酒瓶が握られていた。マスターはわかっていたそれを与えたのは同じ《仲間》と呼べるものの。

「ラクサス。お前はやっぱり優しいな。」

ラクサスの舌打ちする姿を浮かべながらマスターは笑った。その時、

「のわぁ！」

と大きな声がレノから発せられた。

高いところにいたレノが足を滑らせて二階から落下する最中だった。みんなが気付いたときにはもう真中まで落ちていて走っても間に合わないところだった。

が、そこに現れたレノの大切な《仲間》。

「大丈夫か？」

「怪我してないか？」

「大丈夫なようじゃな。」

「よかった。間に合ったんだね。」

最初に会ったあの不思議な四人組。
グレイにナツにエルザにルーシィ。

話したことがない人だっている。なのになのに。

なぜか胸が温かくなっていき四人に満面の笑みで言っただった。

「ありがとう。」

四人も笑ってくれた。
そして、

「私の名前はエルザだ。」

「私はルーシィ。」

「ナツにハッピー！」

「あい！」

「そして。」

「グレイ。」

「え？」

おろしてもらったレノが満面の笑みで言っただる。

「グレイ。そうでしょ？」

「・・・ははは。そうだ。」

「俺は俺は！？」

「えーと・・・ナツ！」

「おいらは！」

「ハッピー。」

「私は？」

「ルーシィ！」

和やかな空気が流れる。

いつものフェアリーテイルの変わらない空気が。

《師匠へ

僕はあなたに生かされてからずっと子の命を無駄にすることはばかり考えていました。

けど、今ようやくあなたが僕を生かした意味がわかった気がします。

あなたは教えてくれました。僕に《仲間》というものを。
わからないことはたくさんあって正直まだ怖いです。

これから僕はあなたにもらったこの命でたくさんの出会いができればいいと思います。

《仲間》と一緒に楽しく過ごせたらいいと思っています。

ところで、師匠。

亡きあなたにこんな質問はどうかと思いましたが、いいですか？

僕は何故かいまだにマスターに――。

《男》と誤解されています。

そして《仲間》にもそのまま伝わってます。

僕はどうすればいいですか？

いまさら《女》ともいいにくいのですが……。

でも、《仲間》なら平気ですよね？

笑って終了で済まされますかね？

それではあなたに届くことを願ってこの手紙を燃やします。

この煙があなたにまで届くといいです。

では。》

(後書き)

夢小説はB LにはさせないW W

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5712m/>

仲間 （グレイ夢？

2010年11月6日13時25分発行